

あなたのみことばは

(詩篇119・105〜112)

一、「私の道の光です」

105節をご覧ください。〈あなたのみことばは 私の足のともしび 私の道の光です。〉とあります。〈あなた〉は神です。詩人は神に向かって〈あなた〉と呼びかけています。神とたいへんに親密な関係にあったことが分かります。とは言っても、神への畏れ(恐れ)が前提になっています。馴れ馴れしく「あなた」と呼びかけているわけではありません。では、〈あなたのみことば〉は、何を指しているのでしょうか。律法(トーラー)です。狭い意味では、聖書の始めに位置します創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の五つの書です。広い意味では旧約聖書の全体を指します。そうしますと、〈あなたのみことばは 私の足のともしび 私の道の光です。〉は、「聖書のことばは、私の足のともしび、私の道の光です」と言い換えることができます。

私はこの聖句を次のような意味で捉えています。人生を歩んで行く際、暗くて先が見えないときでも、聖書のことばは自分の足もとを照らす灯になる、しかし神が照らしてくれるのは足もとであって、先の先までではないと。だから、

ら、その時々にもみことばを思い起こしては、みことばに聞き、歩んで行かなければならないと。ついでに申しますなら、詩人が、灯が必要なのは、人生において暗いところを通っているのだ。だから、光が必要なのだと。ですが、今回準備をしていて、「少し違つのではないか」と考えるようになりました。道というのは、人が人生を歩む上で、どの方向に歩んだら良いのかについてのことではないかと。と言いますのは、119篇には道について次のように書かれているからです。9節に、〈どのようにして若い人は自分の道を清く保つことができようか。あなたのみことばのとおり道を守ることです。〉とあります。人は若いときには、それなりに誘惑が多い。特に気をつけるべきは性的な誘惑であると、箴言は語っています。どのようにしたら、神が良しとされる道に歩み続けることができるのでしょうか。それは律法、言い換えるなら聖書のことばに聞き従うことによつてです。みことばに頼ることにより、様々な誘惑に負けることなく、神が良しとされる道を全うできると語っています。

詩人は、新約聖書に登場するパリサイ人のユダヤ人のように、律法を守ることによつて、自分の正しさを誇ろうとしていたのではありません。そうではなく、何としても主にお従いしたい、主が語られることばにお従いしたいと

願っています。新約聖書に書かれている表現を用いるなら、「御霊に導かれている」と言えます。あるいは、使徒パウロが語った「神の恵みによつて」(1コリント15・10)と重なります。このようにして、旧約のことばを見て行きますと、神の満ち満ちた恵みが旧約時代に現れていたことを知ります。ですが、すべての人に聖霊が注がれていたわけではありません。すべての人に神の霊が注がれるためには、神御自身である御子イエス・キリストが私たちの罪を背負つて十字架で死なれ、復活するということ。出来事を待たなければなりません。

二、道はイエス・キリスト

さて、〈あなたのみことばは 私の足のともしび 私の道の光です。〉を見てまいりましたが、これに新約の光を当てて見てみたいと思います。

御子イエス・キリストは、十字架にかかれる前の晩、私共が歩むべき道について、次のようにおっしゃいました。〈ヨハネ14・6イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のもとに行くことばできません。〉と。旧約の詩人は律法(トーラー)に聴きつつ主の「道」を歩みましたが、キリストが示された道は「わたしが道であり、真理であり、いのちなの

です」という道でした。イエス・キリストは、神が人となられたお方であつて、人であり神であられるお方です。すなわち、イエス・キリストというご人格の内に歩むことが「道」です。分かりにくいでしょうか。ならば、こう表現したらいかがでしょうか。キリストと共に歩む、キリストの内に歩む、キリストが私の中にお入り下さつて歩む、キリストに押し出されて歩むことです。今申し上げた「キリスト」は、「御霊」に置き換えても意味は変わりません。キリストも御霊も、神御自身だからです。

こついでに聖句もあります。〈ルカ9・23イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思つたら、自分を捨て、日々自分の十字架を負つて、わたしに従つて来なさい。〉と。このことばを、弟子になるための「条件」として受け止めるなら、厳しい要求になります。仮にそれができたとしても、おそらく第二のパリサイ人になつてしまします。ですが、イエス・キリストを信じて、御霊の働きを知っている人は、次のように受け止めます。「主よ、あなたにお従いしたいのです。どのようにしたら、私に課せられた十字架の道を全うできるでしょうか」と。おそらく、きょう聞いた詩篇のことばを語った詩人も、そういう思いを持っていたのだと思われます。なぜなら、詩人は神の恵みに生かされてきたからです。